

同時開催

2020(令和2)年7月23日|木・祝|—8月23日|日|

3階 所蔵作品展

前衛陶芸集団「走泥社」の時代

Collection Exhibition: Age of Avant-Garde Ceramic
Artist Group "Sodeisha"

1948年に京都の若手陶芸家によって結成された前衛陶芸集団「走泥社」。新時代の陶芸を志向した作家達の作品を紹介します。



八木一夫 《盲亀》 昭和39(1964)年

御来館の皆さまへ

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、以下の対策を行っています。ご理解とご協力をお願いします。

次に該当するお客様は、入館をご遠慮ください。
発熱や、軽度であっても咳、のどの痛みなどの症状がある方

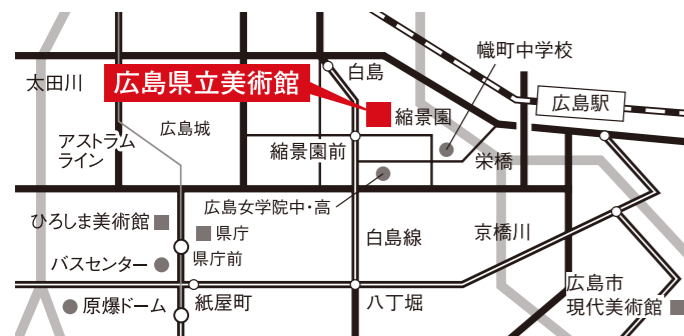
【ご協力のお願い】

- マスク着用 ○手指のアルコール消毒 ○咳エチケット
- 会話は控えめにし、特に大声での会話は行わないでください。
- 人と人との接触を避けるため、できるだけ2mの距離を空けてください。
- 来館者が多い場合は、入場制限を行う場合があります。

広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22
Tel: 082-221-6246 Fax: 082-223-1444 URL: <http://www.hpam.jp/>

- ・JR広島駅より約1km ・広島城より約400m
- ・市内電車(「八丁堀」で乗り換え)白島線で「縮景園前」下車約20m
- ・ひろしまいぶる〜ぶ(広島駅新幹線口のりば発着、市内循環バス)「県立美術館前」下車約80m



2020(令和2)年7月23日|木・祝|—9月27日|日|

2階 夏の所蔵作品展

サマーミュージアム 戦後75年特集

Collection Exhibition: Summer at the Museum:
Special Collection: 75 Years After the War

美術と戦争、平和をテーマにした作品を特集します。



芥川永 《教師と子どもの碑(石膏原型)》
昭和45(1970)年

彫刻展示スペース
造形で奏でる作家
—芥川永—

平和公園に設置する「教師と子どもの碑」の制作をきっかけに、ヒロシマというテーマと深く取り組んだ彫刻家、芥川永。広島で活動を始めたころから晩年まで、さまざまな作風の作品を幅広く展示します。



パウル・クレー 《内なる光に照らされた聖人》1921年

1室
退廃芸術展
—危機の時代の画家たち

ナチス・ドイツの時代、純血主義の理念にそぐわない作品は「退廃芸術」として貶められました。ナチスによって活動が禁じられた芸術家の作品を、当時の資料を交えてご紹介します。



鏡光 《帽子をかむる自画像》
昭和18(1943)年

2室
戦争と作家

戦前の自由な雰囲気や謳歌した作家、戦時中の重く暗い雰囲気を耐えた作家、原爆の投下を目の当たりにした作家、物心ついでに戦争を考えるようになった作家など、さまざまな作家の作品を幅広く紹介します。

3室

小特集:平山郁夫 —救済への道

原爆の後遺症に苛まれながら、自らの絵の道を模索した広島出身の日本画家・平山郁夫。原爆から生き残った者の責務として描く、信念と祈りが込められた静謐な作品を紹介します。



浜田庄司 《黒釉筋流播大鉢》
昭和30年代後半

4室
民藝運動の作家たち

柳宗悦と共に民藝運動を起こした陶芸家・河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉をはじめ、民藝のもつ美を自己の制作に取り込み、独自の作風を築いていった作家たちの作品を紹介します。



Photographed Hiroshima: Everyday Light Image



2020(令和2)年7月23日|木・祝|—8月23日|日| 月曜休館 ※8月10日(月)は開館

開館時間/9:00~17:00(金曜日は20:00まで開館) ※入場は閉館の30分前まで
所蔵作品展入場料[一般|510(410)円 大学生|310(250)円 高校生以下|無料]にてご覧いただけます。
縮景園共通券/一般|610円 大学生|350円
○()内は前売り・20名以上の団体料金 ○障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料。

同時開催

2020(令和2)年7月23日|木・祝|—8月23日|日|

3階 所蔵作品展 前衛陶芸集団「走泥社」の時代

左上/藤岡 亜弥 『川はゆくより』 平成26(2014)年 右上/迫 幸一 《息吹》 昭和29(1954)年
左中/高田 静雄 《平和のこども》 昭和34(1959)年 写真提供:高田トシアキ 右中/松重 美人 《御幸橋西詰 8月6日午前11時頃》 昭和20(1945)年
左下/明田 弘司 《夏の平和大橋 欄干に登る水泳の少年たち》 昭和35(1960)年 右下/笹岡 啓子 『PARK CITY』より 平成30(2018)年

日常の光

写し出された広島

広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22
Tel: 082-221-6246 Fax: 082-223-1444
URL: <http://www.hpam.jp/>



笹岡 啓子 『PARK CITY』より 平成29(2017)年



高田 静雄 《仲良し》 昭和13(1938)年頃 写真提供:高田トシアキ



藤岡 亜弥 『川はゆく』より 平成27(2015)年

原爆投下から75年

広島の写真家たちが捉えた光

昭和20(1945)年、広島は原爆投下により焼け野原となりました。その未曾有の状態を指して「75年間(70年間)は草木も生えぬ」と語られましたが、生活の再建や街の復興に努めた多くの人たちの尽力により、今日の姿に至りました。

広島という街は、これまで国内外の写真家によって、様々な視点から撮影されてきました。そこには、原爆被害に迫る写真だけではなく、広島に住まう人々の何気ない、しかし、かけがえない日常を捉えた写真も多く見られます。

本展は、広島県出身の6人の写真家が撮影した広島に焦点を当てるものです。松重美人(1913-2005)は被爆直後の罹災者を撮影することに躊躇しながらもカメラを向けました。明田弘司(1922-2015)は、戦後、温かな眼差しで広島の復興を記録に留めました。オリンピック選手であった高田静雄(1909-1963)は、原爆症を患ってからは、平和な日常を写すことに情熱を傾けました。迫幸一(1918-2010)は、郷土の風景や人々の営みを造形的な観点で捉え、国際的評価を受けました。藤岡亜弥(1972-)や笹岡啓子(1978-)は、体験し得ない、しかし潜在する原爆の記憶を、今日的な視点から表現しようとしています。展覧会では、戦後から現代へと移り変わる広島において、いかに写真家たちが日常の情景を各々の手法で留めようとしたかを辿ります。

75 Years after the Bombing:

The Light captured by Hiroshima Photographers

In 1945, Hiroshima was completely destroyed by the atomic bombing. Referring to the unprecedented condition of the city, it was believed that not even a single blade of grass would grow in Hiroshima for 75 years. However, the effort of many people to rebuild the city and the lives there has made Hiroshima today.

The city of Hiroshima has been captured by photographers in Japan and abroad from a variety of perspectives. They include not only photographs of the damage caused by the atomic bombing, but also photographs of the casual but irreplaceable lives of the people of Hiroshima.

This exhibition focuses on Hiroshima as captured by six photographers from Hiroshima Prefecture. Matsushige Yoshito (1913-2005) decided to take pictures while hesitating about photographing the victims of the atomic bombing in the immediate. Akeda Koshi (1922-2015) documented the post-war reconstruction of Hiroshima with a gentle gaze. Takata Shizuo (1909-1963), an Olympic athlete, after suffering from A-bomb disease, became passionate about capturing the peaceful daily life. Sako Koichi (1918-2010) received international acclaim for his work capturing the landscape and life of people in his hometown from a figurative perspective. Fujioka Aya (1972-) and Sasaoka Keiko (1978-) expressed the memory of the atomic bombing from a contemporary perspective, which was never experienced but is latent. This exhibition traces the ways in which photographers in Hiroshima have tried to capture everyday scenes in their own ways as the city transitions from post-war to the present day.

迫 幸一 《子供の世界》 昭和28(1953)年



松重 美人 《御幸橋西詰 8月6日午前11時頃(2枚目)》 昭和20(1945)年 中国新聞社所蔵

明田 弘司 《織町小学校で野球する子どもたち 建設中の世界平和記念聖堂》 昭和28(1953)年

